

アジア・アフリカの文学と心

竹内泰宏

REGULUS LIBRARY



第三文明社 レグルス文庫 121

著者独自のA A文学論を基軸に
学の新たな創造の場所を切り開

竹内泰宏 (たけうち・やすひろ)

1930年東京に生まれる。東京大学経済学部卒。1967年『希望の砦』で第一回河出長編小説賞を受賞。1966年よりアジア・アフリカ作家会議に協力、同第三回バイルート大会(1967)、同第四回ニューデリー大会(1970)、同第五回アルマ・アタ大会(1973)、日本アラブ連帯会議(1974)などに出席。この間小説・評論のかたわらアジア・アフリカ文学の紹介・交流につとめる。作家。著書に、

- 〈長編小説〉『希望の砦』(河出書房新社1969)
- ・ 『人間の土地』上・下(河出書房新社1976)
- 〈評論〉『視点と非存在—20世紀文学批判』(現代思潮社1962)
- ・ 『想像的空間』(せりか書房1967)
 - ・ 『境界線の文学論』(河出書房新社1971)
 - ・ 『アジアのなかの日本文学』(筑摩書房1974)
 - ・ 『第三世界への想像力』(現代書林1980)

アジア・アフリカの文学と心

レグルス文庫 121

1980年5月30日 初版第1刷発行

著者◎ 竹内泰宏

発行者 栗生一郎

装幀者 栃折久美子

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区猿楽町2-5-4

郵便番号 101 電話 03(294)8731(代)

振替口座 東京 5-117823

印刷所 明和印刷株式会社

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

0293—1121—4438

アジア・アフリカの文学と心

竹内泰宏

はじめに

一九六〇年代の後半から七〇年代にかけて十年あまりのあいだ、私は中東アラブ圏、インド、アフリカなどのいわゆる第三世界と呼ばれるアジア・アフリカの諸地域の人びとや、文学者や、そこで今日生みだされている文学と接してきた。そしてこの地域で今日どのような文学が創り出され、そこで現在なにが問われ、それがこの地域に生きる人びとのどのような心を語っているかを、私なりに探ってきた。

この本におさめたのは、この期間にすこしずつ知ることのできたこの地域の文学の動向や、アラブ・アフリカ・アジアのそれぞれの文学の特質、さらにこれらの地域の詩人や作家たちとの交流をつうじて知ったその文学の創造されていく状況や、またこの地域での人びとの生存のおかれた状態や文化の動向についてのエッセイである。第一部には、ラテンアメリカをのぞく今日の第三世界の文学のおよその鳥瞰にあたるものや、今日のアラブ・アフリカ・アジアのそれぞれの地域の文学についてのエッセイを集め、第二部には第三世界の作家や詩人たちとの心に残る実際の交流と、それをつうじて知ることのできたそれぞれの文学の特質を示す文章を集めてある。

ここで内容にはいる前に前もってひと言、読者にお断わりしておきたいことがある。

私がいわゆる第三世界の文学に強い関心と、私なりの関わりをもつようになったのは、最初に触れたように一九六〇年代の後半であり、それは一九六六年秋にアジア・アフリカ作家会議の仕事でカイロを訪れたときであった。それ以来私は、この地域の文学や文化が、日本の文学や文化にとってどれほど貴重な問題を提起しているかを、次第に強く知るようになっていった。そしてそれがどれほど日本に知られていないかを、そればかりでなくそれを知るための翻訳や語学などの文学的蓄積そのものが、こと第三世界の文学にかけてはどれほど欠けているかを思い知らされないわけにいかなくなったのだ。

たとえば欧米文学やロシア文学についていえば、この国では明治以来の長い消化の期間を経て、相当に詳しくその古典から現代の作品にいたるまで、多くの読者によってよく知られている。しかしアジアやアフリカの文学については、作品そのものはもとより、語学その他、それについて知るための文化的前提が著しく欠けていたのである。そればかりではない。大学の制度や、情報の通路や、ジャーナリズムの成り立ちから読者の意識にいたるまでの日本の文化の構造そのものに根ざす、日本とアジア・アフリカを距てる厚い障壁が存在することにも、次第に深く気づかないわけにいかなくなった。

皮肉にも、その後一九七三年に突然おこった第一次石油危機は、日本における中東アラブ圏を中心とした第三世界への関心をやむなく、にわかにも高めたといえるだろう。しかしそれは主とし

て経済的理由からで、その経済危機や政治危機をとりまき、その動因ともなっているこの地域の人びとの生死をかこんでいる文化を中心とした問題への関心は、決して高まったとはいえなかったと思う。(ごく最近のイラン革命にはじまる中東イスラム圏の政治的地盤変動は、八〇年初頭のアフガニスタン政変劇をもふくめて、大きく変化する予測のつけ難い政治的・経済的地核変動の底に、第三世界の民衆の表層下深くに根ざした宗教などをふくむ文化の問題が横たわっていることを、人びとにいや応なく見せはじめたといえるかもしれない。)

けれども私がこの本のエッセーを書きはじめたころは、アジア・アフリカの文化やとくに文学にたいしての無関心の状態は、今日にくらべてさえ甚だしかった。一口でいうなら、そこにはアジアやアフリカに文学と呼ばれるものが存在するかどうかさえ、まったく知られていない状態さえあったといっても過言ではなかった。そしてこのような状況のなかでこの地域の文学について語るにあたって、私はそれまでに書いてきたような日本の文学や西欧文学について語る場合は、ややちがうやり方をする必要に迫られたのだった。紹介であると同時に探究であり、知ること、読むことから、それについて書くことから発表場所までをふくめて、ひとつひとつがアジア・アフリカと日本とのあいだに横たわっている文化や政治や社会の壁による境界を破るようにして越えるものでないわけにかなかった。

この本には今日のアラブ・アフリカ・アジアの詩や小説や、それをつつむ文学的土壌や、文化運動の紹介(第一部)とともに、この地域の文学者との交流の記録、対談、紀行、文学会議のあ

りさまなどがふくまれ、足で歩き、話し、訳し、考えた文章が多くはいつている（第二部）が、それもこの壁を越えるためである。いわば未知のものへの探究や調査と、交流や紹介と、研究や翻訳と、そして文学的評価といった課題が同時に課せられたわけだが、それがまた日本におけるアジア・アフリカ文学理解の現実だったといえるだろう。今度まとめるにあたって、私は概説風に全部を書きあらためるよりも、むしろそのときどきの状況を生かし、その都度書いたものの形をそのまま生かすことが、よりなまの形でアジア・アフリカ文学の現実を伝えることになるかと考えた。

もうひとつここに集めたエッセーのいずれを書くにあたっても私をつらぬいていた関心は、私自身一人の作家として、アジア・アフリカの文学が日本の文学の創造の問題とどうかかわりうるか、またかかわっているかをたずねることであった。言いかえればこれからの日本の文学にとって、アジア・アフリカの文学がどのような創造的な意味をもっているか、共通する文化的地盤を足もとにもちながら、しかもそこにわれわれの見失っているどのような価値がふくまれているかを知ることであった。今日のアジア・アフリカの文学は、本文でも触れるように、かつての相互にお互いの文学を知らずに共存していた相互未知の長い期間を終えて、いまやお互いにそれぞれの文学を発見しあい、そこに相互の創造に役立つものを見出そうとする時期にさしかかっている。一口でいえば、今日第三世界の文学は「共存」の時代から「共時発見」の時代にはいつている。アジア・アフリカの文学や文学者との接触を通じて知ったこの事実と、心あるアジア・アフリ

リカの作家たちのこの認識は、この本でのエッセーをかくための私の作業の支えでもあった。

このことと関連してややちがっていえば、第三世界の文学は、欧米の評価を介してだけ理解すべき時代ではすでないといえると思う。もちろん欧米においては残念ながら日本とは比較にならないほどのアジア・アフリカ文学が——アフリカ文学にしろ、アラブ文学にしろ、インド文学にしろ——すでに翻訳・出版され、人びとによって読まれ、熱心に研究されている。たとえば欧州ではA A文学についての批評も多く出され、またアメリカの多くの大学では、アフリカの詩人や作家を招いて研究をしている。しかしそれはそれとして、日本における第三世界の文学の研究・紹介は、欧米のそれのうのみあるいは二重紹介としてでなく、私たち自身の観点からなされなければ、その真の隠された価値を発見することはできないだろう。こうしたことを身をもって教えられ、自覚をうながされたのも、私としてはやはりアジア・アフリカの文学者たちと、文学と、その母胎である人びとの生活に触れてみてのことであった。問題は、日本における前記のようなアジア・アフリカ文学紹介の実情とのギャップを、今後さらにどのようにして埋めていくかにあるとしても。

幸い今日では、これまで述べたような状況とややちがって、心ある文学者の努力と読者の関心によって、十年前と較べればある程度の量のアジア・アフリカの文学作品がアジア・アフリカ語の原語（あるいは作者自身による英仏語等）から日本語訳され、日本の読者もたやすく読むことができるようになってきている。またアジアやアフリカの言語や文学を研究する若い世代も増えてき

ている。この本の本文で触れた作家や作品で、その文章をかいだ後現在までに邦訳の出た作品（主として単行本におさめられたもの）については、読者の便宜を考えて本文中に*印をつけ、巻末に訳者その他をあげておくようにつとめた。これからアジア・アフリカ文学に触れていこうとされる読者の参考としていただければ幸いである。

ついでに述べさせてもらえば、この期間、私は別に一人の作家として日本文学の側から、日本の文学とアジア・アフリカとの内的な関わりについて考える評論を書いてきた。それらは、この本とほとんど同時に姉妹篇のつもりで上梓した『第三世界への想像力——現代文学はどこへ行くか』（現代書林）や、以前にまとめた『アジアのなかの日本文学』（筑摩書房）や『境界線の文学論』（河出書房新社）におさめてあるが、直接に第三世界の文学を対象にして書いたこの本と、日本の文学の内側から書いた上記の本とは、内容的に相互に関連しているはずである。

なおここにおさめることのできた文章のほかにも、私はアジア・アフリカのいくつかの小説について詳しく論じた作品論や、第三世界の文学全体について総合的にやや突っこんで論じた評論や、その翻訳状況や、書評、報告などを書いていく。できればそれらもあわせてこの本にまとめたい希望もあったが、紙幅の都合もあってまたの機会にゆずることにした。

ともあれ長期にわたった私なりの関心と仕事を、このような形で一応まとめることができたことは、私としては非常にうれしく、肩の荷がいくらか軽くなった気がする。この本が、アジア・アフリカの文学への理解をうながすたんなる知識をこえた入門書ともなり、それをつうじてそこ

に生きる人びとの心や、文化や、その生死を彩るものについての理解を深めるための手がかりとなり、また今日の危機に瀕した日本の文学の再生のための創造的な刺戟となり、またさらにこれから第三世界の文学をさらに深く研究していこうとする人びとのためのひとつの参考あるいは踏み石となってくれることができれば、私にとってこれほどうれしいことはない。

一九八〇年三月

竹内泰宏

目次

はじめに

第一部 第三世界の文学 13

I アジア・アフリカの文学動向 15

II 現代アラブの文学状況 27

III アラブの詩と風土 45

IV インドの若く熱い詩人たち 55

V 南部アフリカの詩について 70

VI アジアの詩と詩人たち 81

第二部 アジアアフリカの作家たちとの交流 105

I	南アフリカの詩人 <small>マジン</small> のクネーネ訪日記	107
II	クネーネとの対話	133
III	国境・言葉・文学	152
IV	アジアの民衆と作家	181
V	ベンガルの詩人・スバス訪日記	199
附	第三世界の作家点描他	215
跋文	野間宏	

第一部 第三世界の文学

I アジア・アフリカの文学動向

——展望として

日本から東南アジア・インド亜大陸・中東アラブ圏を経てアフリカ大陸にいたる、アジア・アフリカと呼ばれる広大な地域の文学動向を、個々の地域について述べる前に、全般について一言触れておこう。そこで現在目だつことは、今日これらの地域では、かつての植民地支配によって奪われかけ、現在もまた新植民地主義によって絶えず破壊されようとしているそれぞれの文化の根源をたずね、欧米文明にかわる自己に個有の文化の価値の自覚のもとに、偏見や差別の支配から解放されながら、新しい文学的・社会的な創造力を回復しようとする動きであろう。このことは、伝統文化に対する新しい自覚や、古い伝統とその革新の間にある緊張関係のなかでの伝統芸術にたいする新しい芸術形式の追求や、あるいはまた西歐文明やコマーションヤリズムなどの第三者のメディアの媒介を経ないアジア・アフリカ諸地域の文化・文学の相互^{コ・ディスカヴァリー}発見の要望などとなつて、今日これらの地域の文学者や知識人とらえつつある。

かつてアジア・アフリカという言葉が、強い連帯の意味をこめてもつとも輝かしい響きをもつ